

爆弾全部を投下し、政府区域の爆撃を試みなかったから、此の空襲の目的が重慶市の壊滅にあつたことは明かである、日本機は爆撃に機銃掃射を交へ、空は高射砲、機関銃よりの榴霰弾で屢々一杯になつた。揚子江上は崩壊物で蔽はれ、又爆弾が河岸に命中して数隻の舢板が破壊せられ、数箇の屍体が漂つてゐた。死傷者は五百で死者は百名と見積らるゝが、火災が熾火し崩壊物の取片付けが済む迄は詳細不明である。

一寸前の信頼すべき報告は避難民三百のゐた難民家屋が爆弾によつて埋もれたので死傷者一千であるを評してゐる、しかし其の全部が死んだかどうかは判明しない、有力紙「大公報」共産黨機關紙「新華日報」、「西安日報」及「新蜀報」の四つの新聞社も爆撃され、後の二つは印刷工場を破壊されたので直ぐに発行は不可能である。重慶防空司令部に命中したのは破壊弾であつたが、倉庫に貯へてあつた多量のガソリン、石油が炎上し忽ち地獄と化した。この空襲によつて新たに全市に散らされた空襲避難壕の効力が立證された、一千の死傷者は膨脹してゐる當地の人口を考慮すれば最少限のものと思はれるからである、又新設貯水タンク及び早い火の廻りを阻止した消火隊の能力も認められた。

内閣情報部五・六

情報第四號

重慶ロイテル新聞電報放送(三日) (朝鮮總督府遞信局轉取)

本日正午過ぎ重慶本市の密集区域は初めて日本機の猛爆を受けたが、この時日本爆撃機は揚子江北岸に沿ふ繁華街に爆弾の雨を降らせ戦時首都の多敷各所に大火を起さしめ數百の死傷者を出さしめた。ロイテルの事務所は周囲に爆弾三十箇以上を投下せられたが幸くも難を免れた、最も近かつた爆弾は僅かに十呎を隔てる露路の向側にある家屋の屋根を貫いたが幸にも不發であつた、更に十五碼を隔てた地點に爆弾二箇が投下され、フランス國旗を掲げてゐた支佛船船會社を粉碎した、建物は壊滅して車庫にあつた自動車も破壊された、四人の支那人が崩壊物の下敷になつたが、これ迄に二人だけ救ひ出された、この爆弾は焼夷弾ではなかつたので火災は起らなかつたが、百碼を隔てた現場は最も悲惨で數箇の焼夷弾によつて數十戸の建物が炎上した、木造建でしかも密接してゐたので火の廻りが早く有力支那紙「大公報」の事務所を破壊した。揚子江水面の渡船所では少くも七十名の死者を出した、此處には群衆が揚子江の南岸に渡らうとしてつめ寄せてゐたが、汽船が渡船を曳く寸前に爆弾が渡船に命中したのである。又爆弾散弾が長江南岸に碇泊してゐた、英・米砲艦より半哩内の長江に落下した。更にロイテル事務所より二百碼下手、市公園の西端となつてゐる丘の中腹三ヶ所に大火が起つた、市公園を俯

敵する丘の頂きにも多数の爆弾が落下し、更に東方では銀行街たる陝西路に敵機投下せられた。揚子江南岸の重慶より可成り湧った地獄も爆撃されたが、日本機は明かに此處から東方重慶市街の中心に向つて線状の爆弾投下を開始したものと見られる。これ迄に判明した外人の死傷者は米人ポール・ドラツセル一名で彼は家屋の崩壊で膝に軽傷を負つたものである。支那側戦闘機は市の上空で日本機と空中戦を演じ、一臺の飛行機が焔に包まれ墜落し、二名の乗員がバラシユートで脱出したが、その機が日本側のものかそれとも支那側のものか未だ確實に判明しない。支那人の一人は死傷者一萬と見算つてゐるが、この数字が正確さは考へられぬ、當局の發表は未だないが死傷者合計一千と信じられる。

極秘

内閣情報部五・六 情報第五號

一 外國無線局發信電報放送 — (東京都市遞信局聴取)
二 ダネントリー英語放送 (三日)

一、(東京) 日本軍は漢口の北方支那陣地を空襲したこの戦闘後日本軍は支那飛行機十三臺を撃墜、日本軍の損害は二機との事である。

三日日本空軍は重慶を空襲したが此の爆弾の爲に市内各所に火災を起し市民に多数の死傷者を出した。

一、(東京) 平沼首相は板垣陸相を官邸に招き歐洲問題を中心に重要懇談をした尙外相、並に海相も首相を訪問種々懇談を重ねた模様である。

一、(モスコ) モーデーに際しソ聯各地で行はれた赤軍デモンストレーションに参加したソ聯空軍飛行機の数は二千三百臺であつた。モスコでは六百臺が参加した。

一、アメリカ合衆國陸軍當局者はアメリカの兵力に就て次の様に語つた
「アメリカは百万の軍隊を三ヶ月間に整備する事が出来るしいざ戦争となれば四十万の軍隊六千の飛行兵を戦線に送れるし一萬臺の飛行機製作能力も有してゐる」